

187 内因性胆汁酸負荷試験の臨床的意義

中野 哲、北村公男、綿引 元、武田 功（大垣市民病院、二内）松尾定雄、金森勇雄（同 特放センター）

我々はすでにセルレインの筋注により、胆のうが収縮して内因性に胆汁を負荷して、血中のCG、SLCGを経時的にRIAで測定し、その負荷曲線から肝疾患、とくに慢性肝炎、肝硬変症の診断に有用な情報をうる事が出来ることを報告した。今回は同じ方法で総コール酸を測定し、肝疾患の診断に有用か否かについて検討を加えた。

健常者が負荷後30分で最高2.52 nmol/mlのピークを有する漸減する曲線を呈するのに対し、慢性肝炎例においては、この正常曲線にオーバーラップする様な曲線を呈し、それ以上の高値を呈する例は極めて少なかった。一方、肝硬変症においては、全体に著明な高値を呈し、平均値で見ると健常者の10倍近い値を呈していた。たゞCG、SLCGの場合と異って二相性、三相性を示す例はあまりみられなかった。すなわち、慢性肝炎と肝硬変症では胆汁酸負荷曲線で明らかな差が認められた。さらにこれらの疾患においてICGの値と対比すると、停滞率の異常度が高いほど、高値を示す傾向が明かであり、同じ肝硬変症でも、非代償性の方が代償性のものより胆汁酸負荷曲線はより高く、長く持続した。

188 Subtraction imageによる肝癌の診断
照井頌二、川合英夫、福喜多博義、長岩清之、上原敏敬、小山田日吉丸（国立がんセンター、RI診断）

肝癌のスクリーニングとして、肝シンチグラムは、腫瘍の局在や、大きさのみならず、随伴所見として、健側肝のコロイドの取り込み、腫大の有無、脾腫、骨髄の描出等の情報も同時に得られ、治療方針の決定にも役立つ有用な検査方法である。しかし、肝癌が、非切除に終る大きな原因として、健側肝への転移浸潤によることが多い。

肝癌の診断に、 ^{99m}Tc と ^{67}Ga の二核種による肝シンチグラムを施行し、Subtractionシンチグラム像を作製することによって、微小肝癌の診断、肝硬変合併肝癌の適格な診断のみならず、健側肝への転移浸潤を、陽性画像として描出を可能にし、診断精度が向上したため報告する。

189 肝シンチグラムの数値化による評価について - び慢性肝疾患の診断

遠藤 毅、山田健嗣、吉岡清郎、畑沢 順、松沢大憲（東北大抗研、放） 佐々木雄一郎（佐々木病院、南町クリニック）

び慢性肝疾患における肝シンチグラムの評価は従来1.肝のRI分布の不均一さ、2.肝のRI摂取の低下、3.脾腫大と脾RI摂取の増加、4.骨髄のRI摂取の増加などによって評価されている。しかし、これらはおもに肉眼的で主観的であり、シンチグラムの条件や読影者による差があり、客観的なものにはなっていない。

我々は装置にそなわっているコンピューターを用いて、シンチグラムのデータを数値化することを試みた。

コンピューターのソフトウェアによる微分画像作製によってRI分布の不均一さを強調できる。同時に、臓器RI摂取量の評価もできる。この肉眼的評価に加えて微分データの数値化を試みた。又、肝、脾、骨髄にROIを設定し、RI摂取量の比を求めた。

び慢性肝疾患の肝シンチグラムをこれらの方法で解析し、血液検査による肝機能と比較した。我々の方法は客観的であり、疾患の経過観察にも役立つと考えられる。

190 肝疾患における、肝シンチグラフィと超音波診断との対比検討。

大西隆二、西山章次、松尾淳昌、牛尾啓二、由利秀久、杉村和朗、末松 徹（神大、放） 吉本信次郎、大槻修平（県立西宮、放） 瀬尾 敬、進士義剛（県立西宮、内）

現在各種肝疾患診断において、肝シンチグラフィは不動の位置を占めており、他方超音波診断法も最近の急速な装置の進歩に伴い、著しい診断能の向上をみている。

今回われわれは、腹腔鏡ならびに肝生検により確診しえたびまん性肝疾患30例において、肝シンチグラフィと超音波診断法を併用し、その有用性、診断的特徴について対比検討を行った。また同時に手術、剖検その他により確定診をえた限局性肝疾患についても検討を行った。

肝シンチグラフィに使用した装置は東芝製GCA 401型および102型ガンマカメラ、使用核種は ^{99m}Tc Sn colloid、 ^{99m}Tc PI、 ^{99m}Tc HIDAなどで、超音波診断に使用した装置は東芝製SAL 20A 電子リニアスキャン装置およびSAC 12A コンタクトコンパウンド装置である。